遠 3
2378
1112

天保乙未春翻刻

關東小六昔舞臺

本八ノ八の巻上冊

柳亭種彦作
歌川貞秀画

全八冊

永壽堂西村屋梓

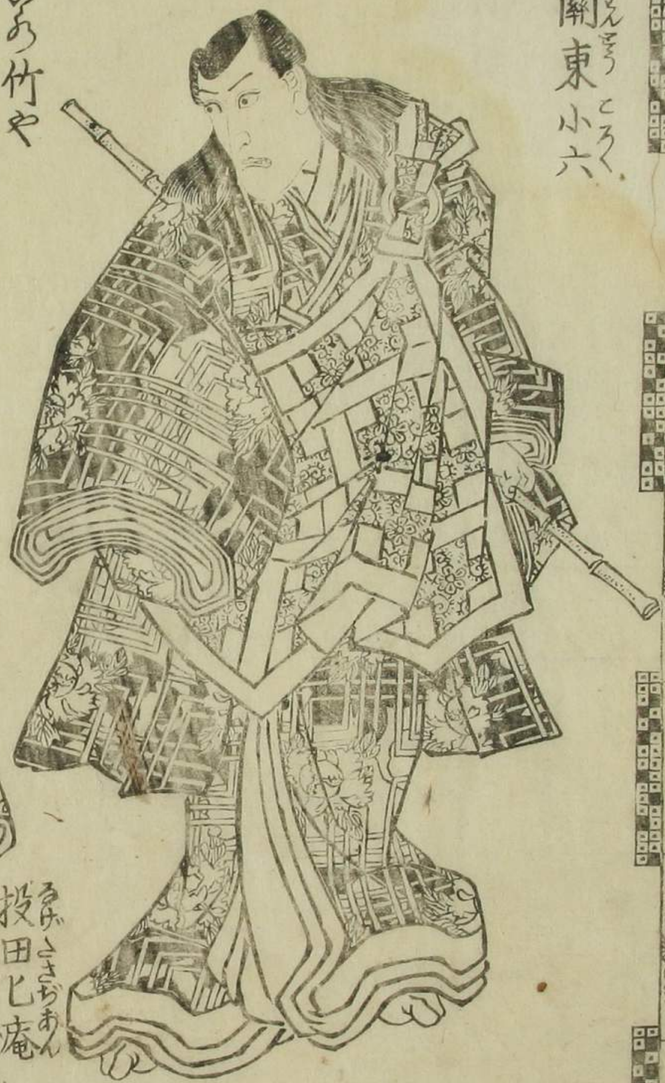
遠 3
2378
1112

辟言喩猫の敗牛をど大るこゝろハロハ汞と呑ぐく眼ハ金色の盆と輝き人怖れて近づくべくもぞ。牛。猫の如くちゐく小くも角づき合の憂あれば膝ふのせその養ひ雛ー。二畳甚室目の浄らるも寺子屋の間ハ合ぜ。二間四方の雪隠ハ穴まどびーそ暗がりハ不便のゆもなるべー。されど犬を大。小ハ小るこそよけれ。此冊子七年前中合巻とくらのふ彫ゑーが茶客ゑむさくろ見枚子とのろこゝをふ年玉の箕へ投こまれ。嵐の唾える姉さまの御愛敬ふちりうせそ。見ー人るーとそ板元の並請のほひでま八冊ふ建るやしまが嵐とる能もるられば重さを運ぶ力もかよこゝき拙作ハ彼牛猫の論ゆもやらぜ再反古と朽るるべし

天保乙未春

柳亭種彦

関東小六



鞠垣の乙女 小櫻

鯛ハ 菊を 咬ふ うまれて

料理人喜助 実ハ鞠垣 左衛門の長子 延太郎

延六郎の妻 吉野

團水

初鰹よ目を まつてけり 若烟草

キ角

朴
小

小六
門
桃
春仔

つぎはきごころのこてもさゆそ小六ハろくまーひのごー「女」とうとうんとてもきやうさんるるごりくんやこをうまりでとのおげごもうんぬーうこへもしやうくよあ大でをひろげちちりけ
うう

ののりそせそうちられとかうるるぐらうもるそとそのかるせそごれの小六ぬるげこそられんーものそうけんひきうくそうるんもるせと

左の上から
おゝあんどやトこうちりけ
コレき助さんあくのきそくぐこちのうちでえろぐをおつけるされるそれでうひせるところもらみてそのさのあるあり
ののあり
ちゃと人のううきさおちぐりきぐばくろうのうけうさアきろうトろれてき助がすトめぐれてもげんぺいみえう
そうでんのぐらんひじ

左の下へ

ゆくぐ
つぎ

ひとりむーやき助ん
七けんぐれで
うぞくヨちやらご
よん

左の下へ

ぬくんのくさこあとをもつをぞーと
あげちうくろ
○そうあそのちんあようきーごのふが
ぶのごころういうんとそうこゆそうの
きあくふそろぺくさこゆそそがやう
ここそよろやアあうアあんのき助がそれ
それやぐんめぐりえあきろこそれてそろくさろうをイヤあらひらをつれてこをふあらうとをおしてていせいもきこんもつきいせあろこうまアんらのこれでよのぐれらえつきふゆうらぺ
ぐおからしアあるあり七ん
えーうくるげちよのちくさまがあびそうぞヨちやらごうそくヨちやらごよん

あうかりこおさまごの人あみりらー
そうでおろうてもそのうまあるまりのやこ五うがるぐびん人をそうてうトうあのもこだらうがうトひとりむーやき助ん
ゆくぐつぎ

さ

玉

つぎ「あつがさんあるとまをすくらめづまるくまうれんなそこまれろといのとゆものひきうせこーかくまもゆものそこまうせのつぬくんぬせこんぐそくせのハせえろうまをまーめらふまきのわづをさくらとまをそでぐうぐそまるものうんくーのかふろうそくでまれるろのづさぬやらぬとさうちのうをひねろでるとうちやうまるだーとやうこうこうそゆがえあるたいのうねぎりさくらぎりありそをわけくとあのくのるこわふるゆぬとのうーくかくのあぐこのちやうまをうろ」からでこまるとわざりとうのくてるるいるこそぐふこれーこうさこうとゆでゆおあくーこをうけくふれそのふつうゆあこれくふかをあくうろうそくふんんーしてごふびんみそくぐきりまをトそうきるびくとくまだらへみゆゆうけまそそらひのけ刃ねくうぐあゆんがそまくふあらーん

四八

筆耕　金川

種彦作　貞秀画

左ム

それうとあるゆふよあうりのさうえんーそもきつのれをあやのうのエそのことーそそをかうさこそるふうちちめ

下冊へつづく

花蔭賤之助傳	人和の巻	柳亭種彦作	歌川國貞画
關東小六昔舞墓	再板 全八冊	柳亭種彦作	歌川貞秀画
明暮仁政鶴籠	全四冊	飯亭種繁作	歌川貞虎画
昭和花の巣籠名寄	全四冊	柳亭種彦作	歌川國貞画
國字小説傳	第十三編四冊	柳亭種彦譯	歌川芳画
正本製初編後帙	人物之巻	柳亭種彦作	歌川國貞画

版権免許

天保乙未春再板

前帙下冊

西村屋梓

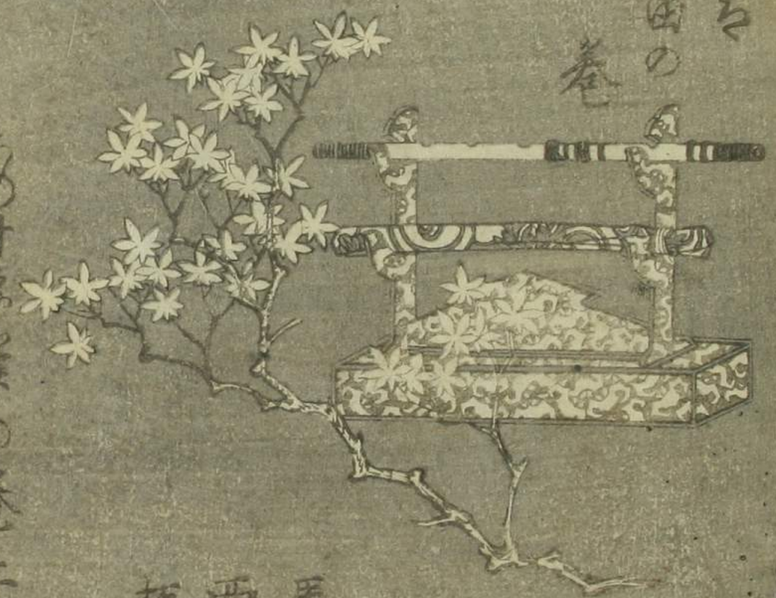
関東小六

種彦作

貞秀画

中巻

笛の巻



その才名 筆下の巻上下共

馬喰町
西村屋
板

さうるうらう
そるさふ
ふでく
ぐひ
まんさ
あやえい
をぢんもるの
おのさぐ あんとやう
らのやそもおりや
つのふおろもおりやあひと
るいぐさりめくあふと
るれおとこくいわ
むいくらのるえとうなを
なぐりかくせうとの
のぶこいこんおやう
この ちらうぐ いくろや
うのつのトおらおかがらうの
ろことをさうりあげちやうく
なろーとうちまるこりや
あんまうるトこーりとあげり
つぐうこをこうをふりくそうをあ
へざつれいうまをだぐいのべちうと
まうりあうみけうんぞうもせあさきふ△

△こうまうふうんぐーそいうやとりの
るへけぐられぬてむうしやれかりのさぐ

つくし
ふせんいつもおれなどの
ところへ
さのみ
あげられまろが
今でいこう
そうなのごちをくいい
左ノ
あやうい
ちょだず
そろそろ
せろ
しゃが
ひそ
とうさまを
さうさまふ
うち
ちゃれ
みそ
あとを
ひきつ

出るもつくともろそふ
しやたりのがるくば
りくやらうとかうとを
たてこもけつけて
ちくの下よへ
のべちうたを
あるるとそ
ひろうんさい
すくあまち
めそあー
さうとふだの
えんつうろ
のりつけるさ
そはいなありや
ひれりのく
ころこそうぜん
右ノ
あげ
桃
そくとあとをもえさしてはのけりきをつき

延
五

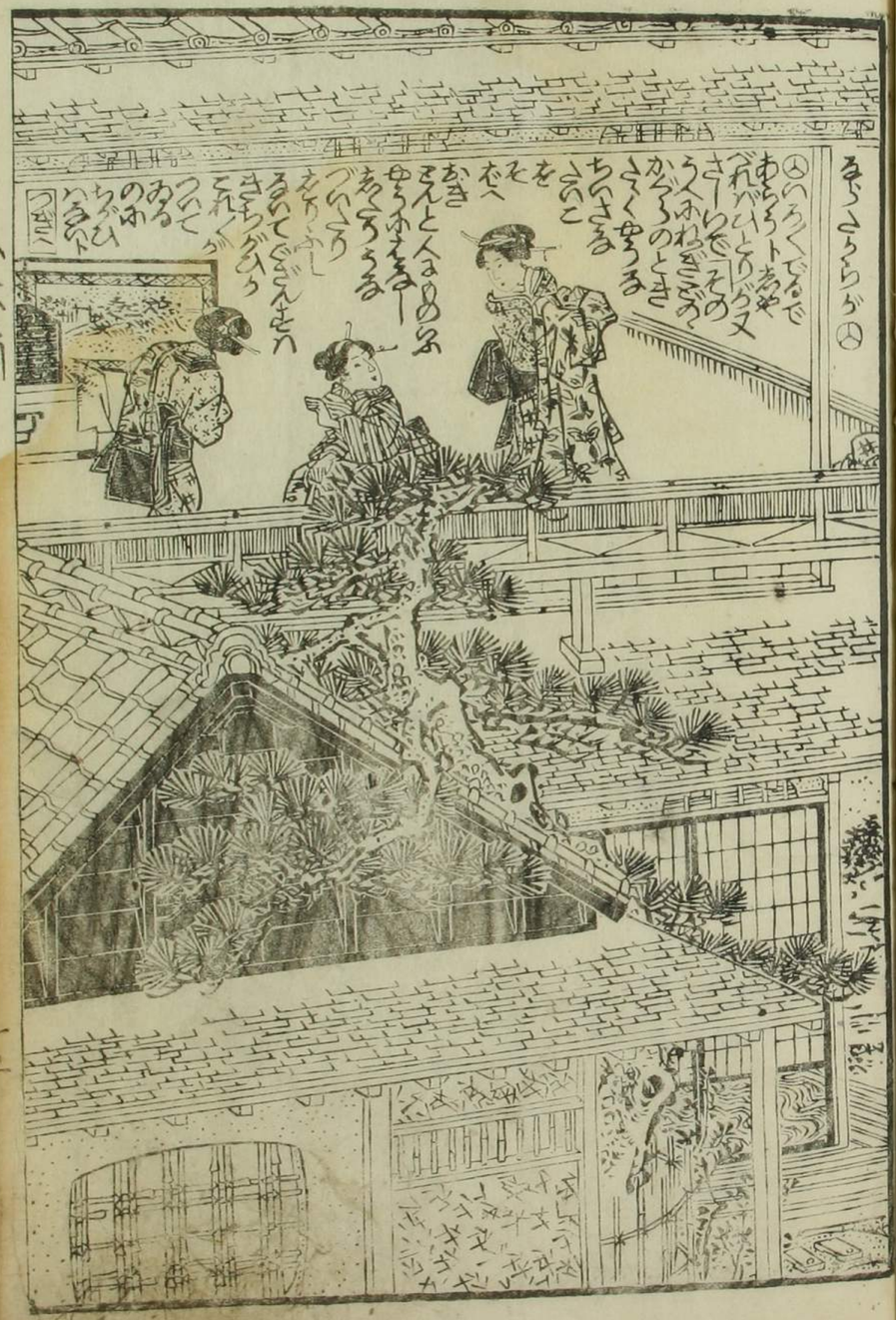
桃
小

つぐさ　ござんあるこうあのひ
ゲけあの
あねさんが
できることと
なりやうそーや
うれーい
ひさー
ぶりで
あゐ
さん
とん
さア
ひろ
あよゐ
ござんせト
かへひさー
ら
ほのうらうら
ちぐうそをたら
両ゆもあろう
さそかそのの
ねろひの
そらのそち
あろうそ
あぐあれい
男のこと

頭原

中の十のごとくにしてこのの
十のごーでうろうれ
たるなりとそり
こんやめ
あろそのべろう
さまのおそさを
ろけそろろへ
くえのかろふをを
うけきてろこ
ろでこそろ
ゆくさんそ
あへ
ろうくふあろさ
ろうくふあろさ
ろうくふあろさ

つぎはまちぐーものそろえのあわせごうで
うぐいすからもものえんじゃあがかくものさえと
あるとうろんであやうくぐうぐうむこぼだらこあこうさバ
こうもあのひこんごあくれんいひうぐさあのりさる
なでのめのけのめうこうまあありひあうさんとこうこ
つんでふん祝のきまうさうそとをーるらいやんくと
いんうこところんてかえあぐりうこへのかうこふうつるとえそえ
しぐうこうとこんてかえあぐりうこへのかうこふうつるとえそえ
かくたみうんとのうけかそうそえさまあーなくトさうこ
あやうさこのあらされかくあどろきうかそうこうけり
ひとまうやうこうこうけり
うこのあとさこのあのさうぐあもおきそむのねうとうこ
おうちを山あおむうんあーあうひいうふるくんくるくんる人
たとえのうるえんやうあおさぐくありまふるもたうき
すそのがうこのはんやあおさぐくありまふるもたうき
「ゑんとあつこあいうのんもこれかどあれのぐふーざるい
そのさーこそうきうてござるきあうござい
あるうのうこごのあさうんんちで
これいおそるやうれうこそかふうて
あのうのこさいまくとうこそそつのふ
たれあうかをこそうのぐるい
それんかうくのいるこをうつし
さうみおのふうそぐくあうれんかういて
あこそうつきの▲



（つぶき）うんがをうすうがいのとのかくしそれをかくしそこへぐそうぢ

日

日うす神そきてもあそばせんあんてへぐさんせ返いまれさとそれ四るは四るのつとあがるさんとけやへうそつらてそうひとまうとそりまーさとそうつきさをうろきかけりのくさるもるいおやくり

左上×くるーいとそとうそあやんをぞぞうひやまれをあゆさんハトうちうるをあゆいあーとあ

●そののちハんまんようう

あーやをあくれがばんそとのそのうくゆそこるさよりあんそせんとのつこそもつきれるくあなくさせれせうあやがもあれべさぞんなぞこのめんもまこまれぜせんろこへこうぢとつぐそやうろこへこうぢとつくきてあるさもるーみをるさんハけうらみをめうさんさめこうをうかーさきへせろーやがちぎやうあよこれようぐぶりさるものをぞうくーてうのちゆそあるくとよやうぢとこえんよりやらえんかされまのトらされてろーとのべるうーあのきついてさーうっぶきひっともまんでくのきでんのうーみさうるるうーふさるるんびやうとうけうるんひとよあらうむぶんろくあまるひゆもさまとえこせをねがえんれがれがひあさうあるもとこうろひれまりよれまりあるやまひがらにをうふきてこれれさへおりてをえせれいふざくーれのまりセーを

「人ハかくーそとも〳〵へもつてぐうちよくるびやうさぢやとくぐうふでひとまつ中ーよりくうをもうつうつきのまうりあんびやうとうけうるんひとよあらうむぶんろくあまるひゆもさまとえこせをねがえんれがれがひあさうあるもとこうろひれまりよれまりあるやまひがらにをうふきてこれれさへおりてをえせれいふざくーれのまりセーを

ある小六らぎとうけてろひゆうもハあれあそうけ

（下の右）

まろる

そうれうらんうれがこうちまでそうちまでそうちまでそ

つゞき まるこさろづくちひろくこどりのうえにおどろとへんじたるのえんぜをひさごてみるのふせきそのあのさまのことふるくらそのみまくらんやうるのきおろくこおるさんぞうくそんなるまゝとちやいろれおるそうやんへんとりやまあさうせうそんとせうとそるきうろをるれば小六はあてをどろけるけしきもなくうちをそらのそのろこもおひんくしこうまさんもさそねがうるさそくへるぞもやこえれいなわどひろが女ぶーとさこまろくそのなのうりがそまふくるとそへんくをまる

左の白 わしたちのハおやつうふしもりておけおよりきうくこちりやぐーそのそうこうはのぐーそうこうらの小そでおじんぐーうちやうそこれふとんやうそんとこへとこへんくをまる

桃

中の白 さーぐらも小六はさーぐろりふさうとりくりくふーぎそれねそもわのエそぐそこむりーとのつゞめをぬのそさうハうのぐーくねぐりさげうふさうのそうちようごりぐさそさろづこ

〔ニヤ小六さんりとこりのふきうそこうあうげんーそんぐふりがけるのあんこのおをさそうさるーそうりくそのごがーさうーこてうーかあうさんのあうと、さざまる

そのまうりのハぬりでまちやうこのかぐろのつこうーぐのそうこそさそこうふとみあるとぐうそりくそのごがたなのてーかぐろふ 下ハ

小六さんとゆうこよろうそのろいるとのろいるとをうとのこのこのこ

[illegible]よそのそるごふそそーそいいきてのまうしあんでのさうりえてうてつぐるうとーそかまものいりくめうこふれればそそもでもるるーどことでのでうまきつけてくあんーてくぐえんせとうをまするトてをうちあそせるこでふむそいえそーきふりいねさんのあそでもしーやさうぬきうぬくトてんとまるそでどのくをみあっとこう「ここでそむくとまぐふかんでうさアどくみとてやまられあねうかいふるえくをうここのでーことあひさでれをるこのみりっろうのう「それちやとのつてこれがまア「そをきつけのるいみでいあるトづまうつまうーつおとびいうおくそひそねが小六いまうよろ「これはせいどんそさをてうひこまアとまおひつおくりそるでのくあんをされいこれいはぬまうーてられとのみさでうりでついちうとコレ小さうとのあのいそでめそるとどまでふとまでとをあの」

おりひのあろあんいさのぜんふままのうげまそ

きくりくなるこのなものふらぞあんそのみさそもしそさをるしやうくふうもむらうそどふふ者うそまごーとあらうそをまごーとこれれのまるそびをーとさ。そうあのるそもあむるうぐうるけれかをくえんづくでひづまるのいよふあるそうねぐびをうをうてやらんとのかせのえんはたてこれとなぐをひごうせをのいとりえいふる。きんてうをーさあぐえいふる。ぐてんがのうトらひさとされいざうそゆうくかをあげ「そんるらわねさんまうスのあれせうそりきまするまのでうをうんそうまるこえうんめーとのひさーてふのたりとうをあるくこふつむりぐらーさ

ござん苗トおりねうーふそんそうまきもぐれみうーとよろのうちひうをまーけあひ者うぐのうちきーのそちうくうさうりそとくとまるそとつるそこをくこふつむりぐらーさ

ごさ　ぐるーさんで
ろくえふり　やり小六ハ
るをもきもうぎを
たでー　さで今あら
きーやせーとなり
んおんのまるひを
やくりえるとも
むやまめんでなるぞ
るぐるあれとをて
らりとろいろふをれめと
とろえれんゆあんその
そもちよろをれぐーが人ふ
あるそのおそねぐてー
らるよ小ざそろてそうく引る
くぐむのこもちよう
ごそんトのうへくくごぐへ
らまふおそそ私とあるそあ
ああ私うてーしるえおもめ
男女神をそんこと
あごるろうきうを
よふるぐさはあり
ぐそうえんーますす
やくーさまうろあふ
さんがありどうをれさ
そのうんでいさんのりをを
ありめぐろうぞうろ
志もの
しょう

あらうあねさんへ
あのやうよ
つまろうら
やさーのおうまれ
つきんふ
うら
をを
うけ
さ
あゝんをきろごいへ
そぢんもるのふるんのむくひでおのやうるあそろーいごるんびやうそれがかるあろうどざんをトさもるごの一トあぐれさろとふきこむうぢふろくるいろふりのるむとよくぐれバ　右へ

きえてくうくとあんーのひのくきけり

小六みくを
そなどて
今うへハツの
るやうきちうぁ
をさまろてんきこうれ
みるのぎろくつぐへ

漢楚實傳演義 前編八冊 後編八冊 曲亭馬琴作

千代袴長者聞集 前編八冊 第一篇近刻出来 後編八冊 第一篇近刻出来 右 北尾重政画作

淨瑠璃小子部事 全四冊 歌川貞秀画作 同 林屋正藏作

怪談牡丹燈 全四冊 歌川國貞画作

活金剛傳 全五冊 香蝶樓國貞画 為永春水人作

繪本頼朝代記 全五冊 貞秀画

東都 書肆 日本橋通壹丁目 西村屋與八

關東小六

後帙上冊

遠
2378
119 2上

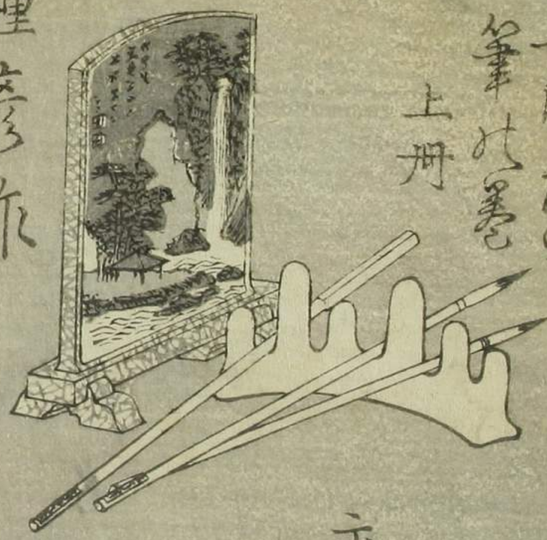
遠
2378
119-2止

關東小六

天保乙未翻刻

柳亭種彦作

歌川貞秀画



永壽堂上梓

關東小六後日の噺

柳亭種彦作

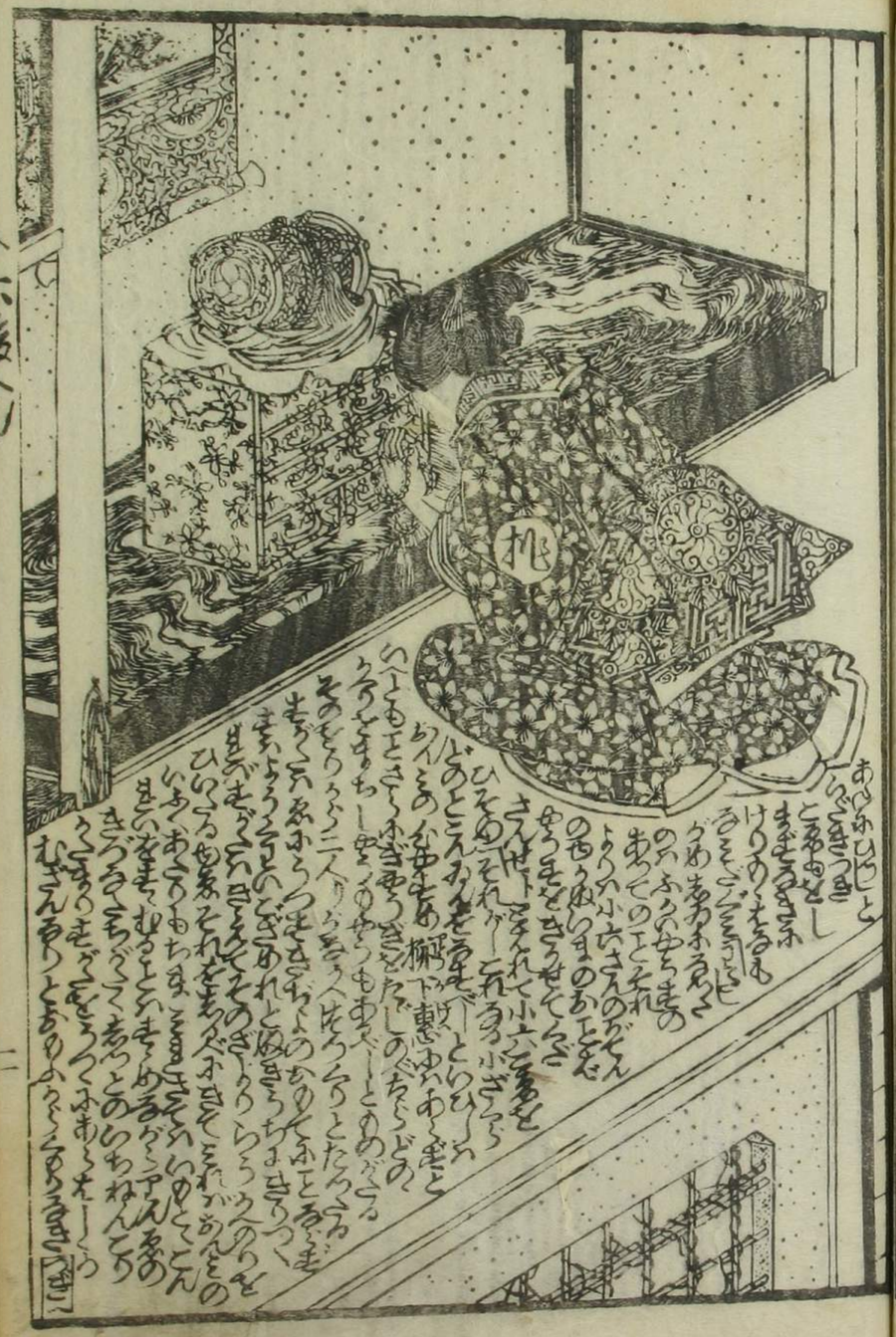
歌川貞秀画

丁丑初冬

馬喰町二丁目角

西村屋板

昔舞臺 八冊續


扒

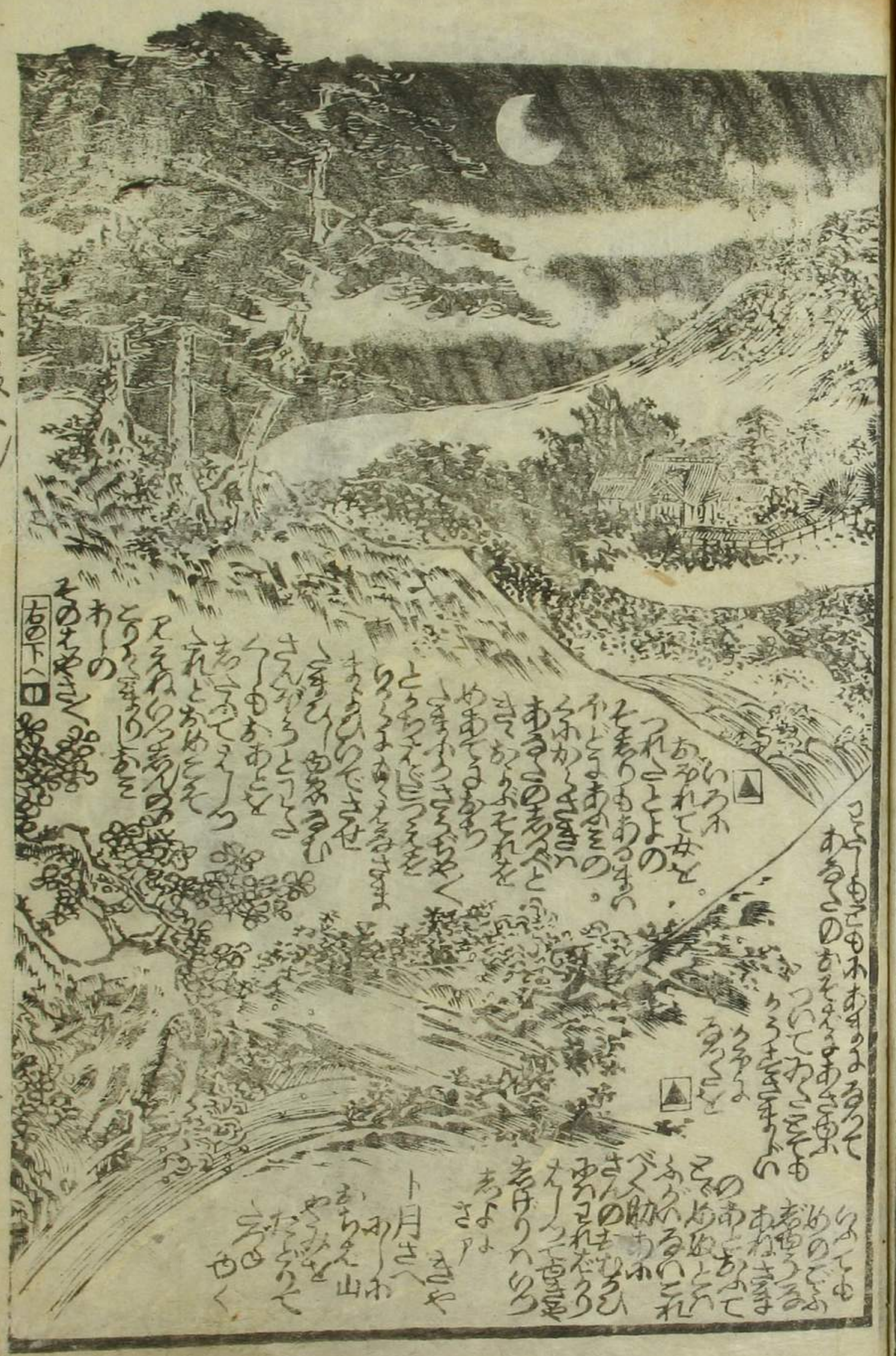
北

小

揚

小
松

桃



[上ノ巻]

[下ノ巻]

無盡
三十日 坂本氏藏

南無薬師大菩薩

天保六年乙未春新刻

青物地本錦繪團扇地紙問屋 馬喰町貳丁目角 永壽堂西村屋與八

甲陽軍鑑諸國物語

大和の巻　全八冊　柳亭種彦作　歌川國貞画

花蔭賤之俳優

全八冊　柳亭種彦作　歌川國貞画

關東小六昔舞臺

再板　全四冊　笠亭仙果作　歌川國虎画

用捨手段鶴巢籠

全八冊　柳亭種彦作　歌川貞秀画

增補再刻花紅巢一對若衆

全四冊　凱亭種繁作　歌川貞虎画

國字水滸傳

第十三編　四冊　柳亭種彦作　歌川國貞画

正本製初編後帙

大切まで　柳亭種彦作　歌川國貞画

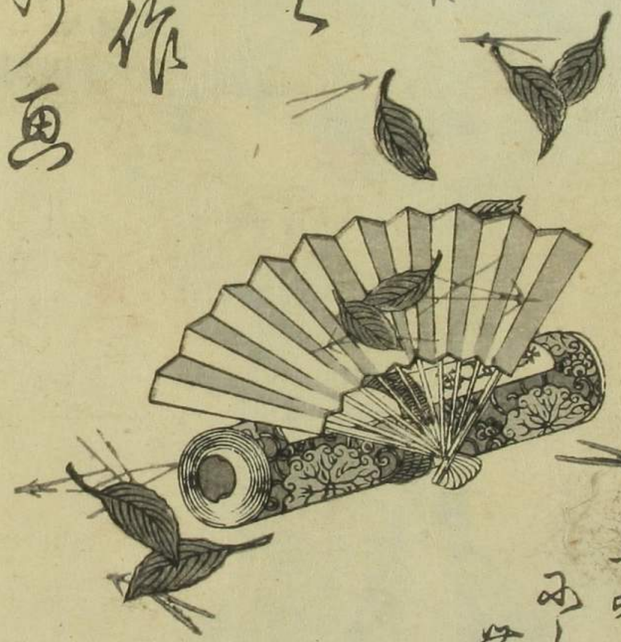
種彦作
貞秀画

乙未再刻

永壽堂板

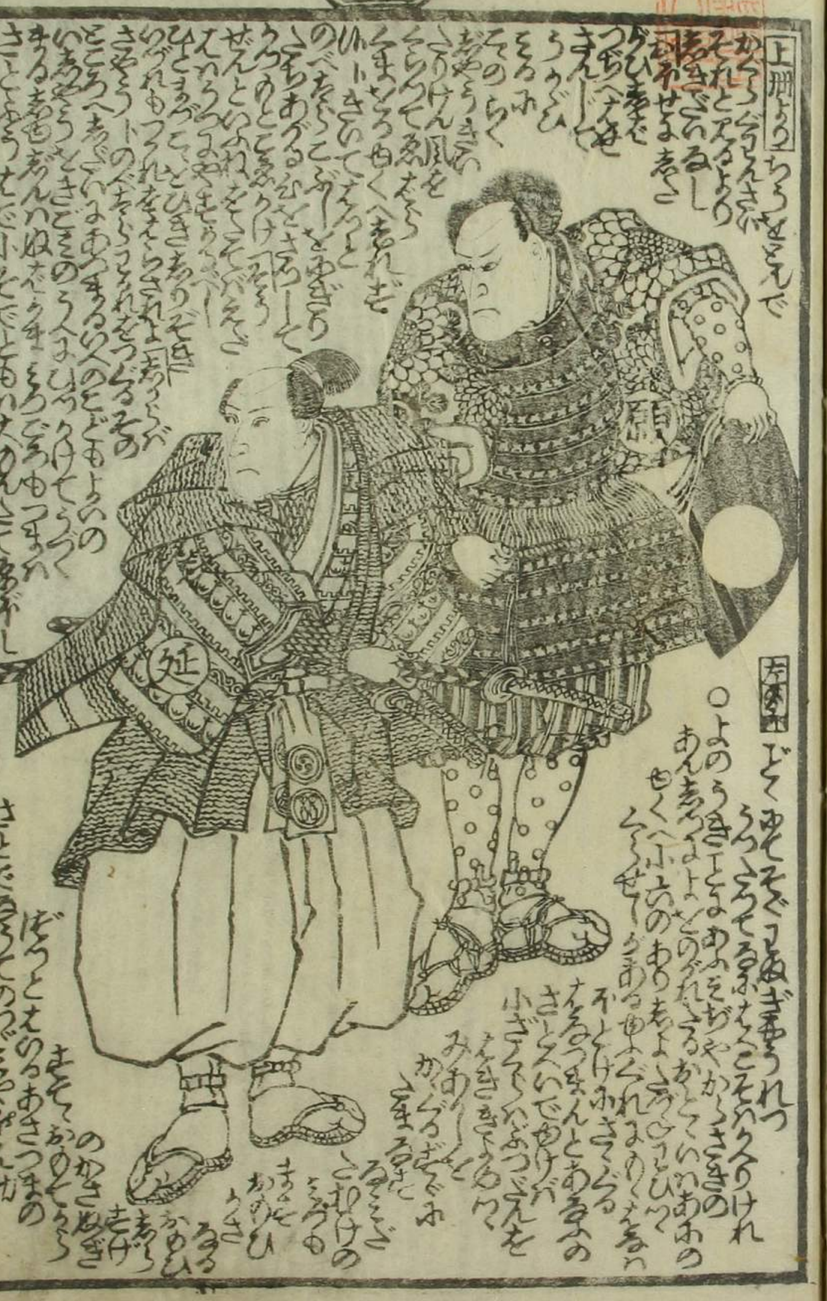
後帙下冊

第乃巻 下冊 全部 大尾



馬喰町 みしま屋 阿波作

翻刻



上冊よりつゞく

おらくごうらんさんでそれとみるよりあきごのるしおやせよおらくぐひまをつぐもへんしまんしゝ

そのらくおやうきのうけん服をらくまもろ白くおれたらくいきのてゞろこぶゝをあぎうろうのとこあうけそれそうぜんといわれそれてんうろおやもうへひとまぶこてひきあうそ白のびれもつれをそらうされ上あうらがさやそうトのべそうろうれをつるそのところへあぐいなおまるひんのこどもよいのいあやうとさごとのうんおひうけそうぐきるまをぎんかぬたゞうまろぐるもつまれさとうろもでかをでとともいんのんとこあがしろもまひきろでかうろまをのろおひおぶめ

どくゆそぐうぬざまうれつうろうろてろぶもこそいろくのけれくまもろ白くおれたらくいきのてゞろこぶゝをあぎうろうのとこあうけそれそうぜんといわれそれてんうろおやもうへひとまぶこてひきあうそ白のびれもつれをそらうされ上あうらがさやそうトのべそうろうれをつるそのところへあぐいなおまるひんのこどもよいのいあやうとさごとのうんおひうけそうぐきるまをぎんかぬたゞうまろぐるもつまれさとうろもでかをでとともいんのんとこあがしろもまひきろでかうろまをのろおひおぶめ

ヲイあぶごけぐろへあけませんへぎへ

つぎにかるともぐんせねうトそりぐまときせる
大だだりあやうろうひきよせまろそもをを
小さくくいる玄あやくーてあやくそくを
ちうぎぶよろう
とたさてそぐ
さんーこのやく
りうそれい
そろちぐあやそう
だのそんあう
こるんぐ百ッよろうそ「さいきアうね
さそこてーてこされつとあるのい
このくごあうとうしくこれるのい
くひようけこのつてきまぐぶいんで
のらえろうヨアまありいまあり
まきろうがあさんよ山とついつを
かくーてつさんーが
そひとろそもくの
るれいこてうひ
ひとうい
ようそるぐ〜
いとまこひも
ぎくいそ
そどよ
あーこの
むさあね
さんの
かりの
さあぬ

ぐるぶごうーてぐぇん
ーくたのこのあトーさ
ととでいるいトのそれで
のたる
うちろ
「ヨぐるも
みとけ
さまく
あげう
とな
あ
のさとそ
あちこうとおかひ
をあくよ
らうとーさ
ごころくれは
ぐるあきこふ
あの山こえは
わのぐるこれ
ちくーまみるとそ
のまろのこらを

そのうちホ
ヲるホとぐさうのよも
あわうまろそやもちふこんやん
ごまろってくへうちホつれふこうち
そのときうくのもうこまぐそやトこう
いそぐーきうふりアけり
ふぎごーふをりくとうぐをも
まぐりきやうつてあ号ハンのぐの
そろぐこまもきれてれんくさ
うくよくのがぐそとろでまそ
うつしうけるふりんがん
これまれ句こう
おちてもくそのあるう
キーどっでさめふ
こそうのうけれ
のされふやりするふ
ありーのあそれを
さるそのこれ
のまれそれふ
ひきりんてうそを
いのろのみぐさうア
くごまよえそとつそのれて
るけれどあてろれうもの
こいてトころをぐそんの
あまハあーこあ
のうくるまも
カーくんろの

あぐひまる
それいまくく
オるのこと
むさう
てもこうひん
きづてーのの
いのうへをまり
るされよがあけさ
うくくうくうそあげ
びせんこうくあれ
きをろとあつれ
りしてうふトト
きいて小
さうこと
ようそれいうう
こそあきづつくさ
るけれどあてろれうもの
こいてトころをぐそんの
あまハあーこあ
のうくるまも
カーくんろの

「ぐき」のぞこもろるぞ
あまろさへうちのら
なるのへたら
うろのとの
てふあそうひそそぜも
つのようくめのうろ
そくのろそてこれがものこの
らふゆいあよふまのおやくの人よ
なそこふるくこころをあるさ
おひとりでいとてぐろてこさ
さるいろさげ
るいとでいるいろ
さんこ
人のふ
からぬ
うろ
ちろ
とも
そうと

「やり」それろくこひごうをろさ、せるうち
たてけがやをふろ「ふをそふ」そうごご
とりふでけらごをあさづまの
あやろくなーてろうされやく
そくのろそてこれがものこの
らふゆいあよふまのおやくの人よ
なそこふるくこころをあるさ
おひとりでいとてぐろてこさ
さるいろさげ
るいとでいるいろ
さんこ
人のふ
からぬ
うろ
ちろ
とも
そうと

「さてふそうげ
とりふあそうひそふ
そこうけろ
さ紀のあん
うがひそればむろわかそりやぐの
やうるふくればらそのうくあろえそまぞ
のうりやあそろ「ふやとふりむくこるさま
きうりのんをうろーとおさそりぐのろ

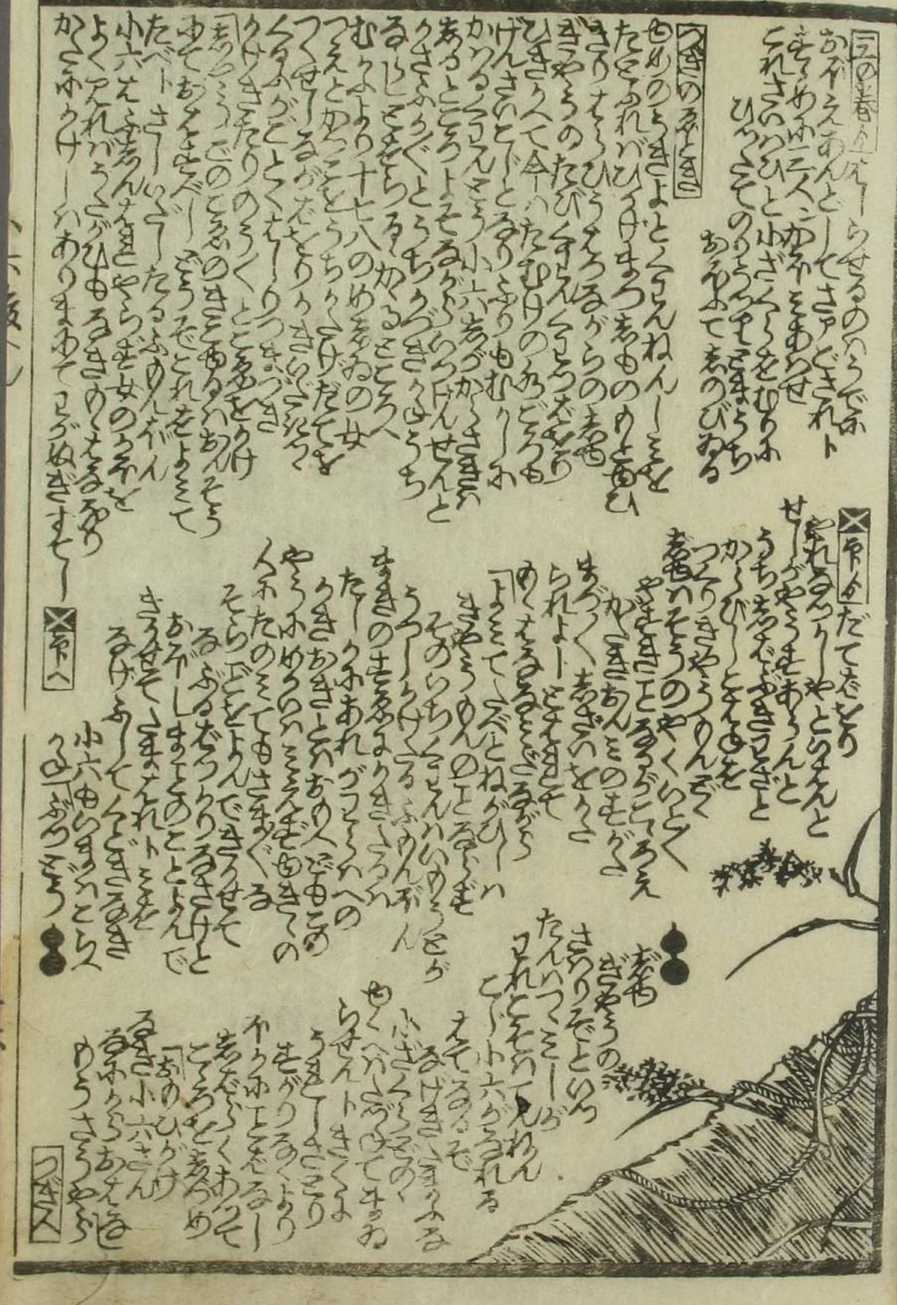
うたろとーこかこまふ
まふらをかえさうろ
ころさいころをトぞうときし

どころむろ、のの、とまがあもぐーよ
あでうろらーく

「ろくめんぞうそうせ「あれーこえ」ンがくもり
かくるを「まふやーくトこまふくけて
るぎさふつるぐふるのろまをよ
のけてひとりの
せんぞうろさも
そくぐまふもろくとこも
。今こそぞきのてあれば
こるさんころ
よぐもけて
人ふかふをを
こられてう
ごのトのの
こびやとの
のしるからろ
るきうめく
その女を
せこをてーくも
るぐいの
さぶもてひる
ひろぞうして
つれてあろろく
のろひえ
あろーでるこぶ
たくこれでい
ふのぐごされれど
だんぐくまでもあい
くぜもるぞろ

つぎは女をうれてこうくるぐらゐのつてこそされがんぢろうるせんざうも四五人おれがよめんがあってがかうてもめびもさてせわけかうゆいあろうてんせうそんるエラあれがまやうなくだのまようこそとせうトふるそこよりしきいさーうるうやよきおまめこかまもろーぬあぐりまえめものひえぬさろぐろさ

くぐんのせんぢうかトをとたり人やきくくいとのふさいふまをさまはうのエそであらうひとろいさまが五工三十



あゝをとこぜもせんたうつれ
うれしたりくれらりとぞこのーろ
きりこまえある
小ざくらふ
つとあさをて
たゝまつそもた
くまーね
これこのう
あゝこと
あゝこのう
くをさそうを
くをふろう
をもてさまよひ
でこかりやをりとー
小ざくらをそうろーて
たゝーうれしがあきあうのまゝあゆ
せきたうめくりこうふ
よこんでは
よこんぜんぜんぜんぜ
ようそんでうりこうふ
ア
あうのごとくそひんかせまろそ
小さくらんあさつま
あやきん百ア
これをろうふあふのもくへまろくさへ

小六かくらあうろを
よとあこのうき
あきあんーられるのくまくら
どのゆいてまうちやくられ
このろうそんのまうひへのどり
くうのそんをみらあとくいの
ざいまよをみひてみさまよ
ろういまこのあやきんを

右ハ図

ひーきろふまろうのる
ろゆさのまれがひつ
やうくきのあよのさのぜん
るこまぶくあやーき
カゴ二三人ンのざるひのせー
ろうふうさぐひるー
ろさへ
のどさんころさへ
ろうそりーと
ろをつきひを
ろくそのよゝ
のうさんト

下ハ図

甲ハ図 たかーうふ
よそぐれこまの
タよりやこうろう
さうのそのやろう
ろうくありや
たーうろうんそう
小六おとうさこと
こうののの
やぶル
ぬさるる
ろだろ
とのト

つゞき あゝ見ろうぢんおやさまをなのべ
ばやもうれしさうさまあうぢまをれ」
「こゝろをとうろうやまもふがまくあき
うろくと小六をめがけうろうんでかゝるをめん
ぢうなとうそうぢまうろうんでこまあゝるげ
とこあゝきをさろうとあ
「きさまのめぐさいくち
のつえをくぐるうと
とまあゝるうろうろ
みそのうをのつてやり」
さけとのろとふ
うつろうきさ
うぢあんへ
やをあゝ
がんぢうえよ
つるもうろうりと

ふと あげりこのおめぐろあひ
やうまもとときけびのくるさま小ざくら
さまもひあとをまゝふとうきふ
きてあゝとをまゝふてきこのおを浴まぐ
ふりへうにのせ
さまをうさまめぐようたかりまろかくりくの
このさぐくうもこをるいやをれれ
どこかををきやくろさんりと

ちのくとたて
のまのうせ
どこをがこふあゝや
まちをもらんこと
ちそれて小さうら
さまのさうりぐ
まふふまでり
らぢまひ

ちのよこされて
あくちひろ
ひまをそこととろ
そあそうあそうぐ
あのんがふとこころふ
てをさーてをそうく
のろうる山とりの
めのきあをひき
のにきーひらりと
ふりあれいそれやうてん
とちどころくあぐうまま
そうりうっもちあうるを
うひうあけてせんごうが
さえんくふうをうちあせ
「これくうそうこうちあせ
あきまうのんやとりうりの
やうまうこのかのあうるを
きりそあをれトをえてそり
うにこ二人をあさえてうく
すうき。ふさてうあふそう
さうり「うきあさとうひをを
のにこいあうをでていよあけ
ちんありひうけうのおさづまの
ちやうことのふさのんてきくさの
ちりうこのの今小六さまこてのう
ちうそうりれてこあんでまままさ
やをふぐそうざとりをうろうの
やをみくもとふあのでおだうの

門

小
花
吉

漢楚實擬選軍談 毎編八冊 三篇迄 出来仕〻

曲亭馬琴作

千代褝良著聞集 毎編八冊 第二篇 下帙出来

右 同
北尾重政 画

落噺年中行事 全四冊

林屋正藏 作
歌川貞秀 画

怪談桂川浪 全四冊

右 同 作
歌川國貞 画

活金剛傳 各〻冊ゝ袋入小本 こらるけ愛出れい

立川焉馬 作
香蝶樓國貞 画

繪本頼朝一代記 全五冊

元相 健 満人 作
歌川貞秀 画

鯉の花戀竹 全四冊

為永春水 作
歌川貞秀 画

馬喰町二丁目
永壽堂 西村屋與八
南傳馬町三丁目 坂本屋民製 東都本問屋
黒油美玄香
仙女香一包 代銀
美艶仙女香

貞秀画種彦作